

# 月 報 NO.72

神戸山岳会

発行日 48.10.1.

発行所

神戸市生田区中山手通1丁目

10509 前田方

発行者 乾 昌弘

## 例・集会スケジュール

9/16	ボッカ、天狗道 - 摩耶山 - 石楠 山 - 杣谷	布引 8:30	L. 釜本
9/23	なし		
9/30	月見コンパ、保塁山	前夜 阪急六甲 20:00	L. 植原
10/7	ボッカ、保久良山 - 風吹岩 - 一 軒茶屋 - 東六甲縦走路	阪急 岡本 8:30	L. 立岡
10/14	強歩、住吉谷 - 水晶谷 - 百軒	阪急 御影 8:30	L. 内藤2
10/21	<del>滝 - ロックガーデン 下田合同登山 読 図、帝釈山系</del>	<del>毛田神社境内 高速新開地</del>	<del>8:30</del> L. 釜本
10/28	<del>R.C.T. 雪彦山 K.A.C. 祭り</del>	<del>前田宅 9:30 西藤宅前 前夜 20:00</del>	<del>L. 三浦</del>
11/4	ボッカ、菊水山 - 摩耶山	平野 8:30	L. 三浦
11/11	全山縦走	塩屋 7:00	L. 植原
11/18	R.C.T.、保塁岩	阪急六甲 前夜 20:00	L. 野上哲
11/25	ボッカ (20kg) 天狗岩南尾根 - 小川谷 - 番匠畑尾根 - 石切道	阪急 御影 8:30	L. 立岡
12/2	R.C.T.、不動岩	前夜 国鉄宝塚 20:00	L. 釜本
12/9	ボッカ、菊水山 - 摩耶山	平野 8:30	L. 内藤2
12/16	R.C.T.、保塁岩	前夜 阪急六甲 20:00	L. 立岡
12/23	冬山合宿準備会	前田宅 9:00	

委員会 9/5 10/3 10/7 12/5

集会 9/12 10/17 11/14 12/12

## 目 次

74 冬山合宿計画案 .....	3
------------------	---

### 夏山合宿

屏風岩東壁、雲稜ルート (釜本孝彦) .....	3
同・鵬翔ルート (古賀英年) .....	4
前穂高東壁、右岩稜 (三浦靖男) .....	5
同・Dフェース (立岡佐智央) .....	7
北鎌尾根 (南みちよ) .....	8
滝谷・ドーム西壁 (立岡佐智央) .....	9
夏山合宿 (古賀英年) .....	10
滝谷・ドーム中央稜 (立岡佐智央) .....	11

### 個人山行

7月の錫杖岳 (内藤久嗣) .....	11
剣岳 (萩本維都子) .....	12
東北、朝日岳 (立岡佐智央) .....	13
イリトウシ沢溯行 ( " ) .....	14
屏風岩・ールンゼ登攀 (内藤久嗣) .....	15
会員動静 .....	17
月報投稿要領 .....	17
編集後記 .....	18

## 74 冬山合宿計画案

- 登山地 穂高周辺  
横尾出合にB・C設定
- 期間 48年12月30日～49年1月6日



### 屏風岩東壁 雲稜ルート

パーティ 釜本、三浦

ールンゼをつめて、下部岩壁の取付点で登攀用具をつけて準備をしていると下から他のパーティが登ってくるが、我々のパーティが一番早いのでマイベースで行けそうである。

アンザイレンして登攀開始したがまだ何となく体がかたい。40m2ピッチで樹林帯に入りあとはコンティニアスでT4に着いた。

この頃には陽も当って体もほぐれてきた。

T4から鵬翔ルートの立岡、古賀パーティと別れて雲稜ルートに入る。

1ピッチ目 ジュードル状になった凹角をフリークライムで20m登り、1ヶ所アブミを使用し、通常1ピッチ目のビレー点となる所を通りすぎてもなおも登り、凹角をぬけた所でザイルが、40m一パイになったため、仮ビレーをとり、ラストに5mほど登ってもらい2ピッチ目のビレー一点に着き、ラストを上げた。

このビレー点はいままで凹角とちがひ、フェースに出た所であるため高度がすばらしい。

2ピッチ目 ビレー点から右上に向って第1ピナクルに登り、なおも右へ第2ピナクルへ、この間、1ヶ所初登の際のボルトを使ってのトラバースはボルトのリングが伸びきっており、切れそうな感じで、いやな所である。

第2ピナクルからは扇岩に向って左へ容易なバンドをつたい扇岩でビレーした。横の大テラスには、立岡、古賀パーティが下半部を終って着いたところであった。

ここで、おたがいに写真をとり合って、いよいよ核心部にかかった。

3ピッチ目 垂壁に一直線に打たれたボルトをアブミの掛け替えで登るのであるが人工登攀は初歩的なもので容易であるが、うわさどおり、初登の際のボルトは、全てリングがやせ細って伸

びきっており、またリングが切れて4mmのシュリングがとおしてあるものがあり、ボルトに神経をすりへらす登攀である。しかし、要所々々に打ちかえたボルトがあり、これにランニングビレーを取りながら快適に40m登りボサテラスでビレーした。

4ピッチ目 ボサテラス上のハンクのひさしに打たれたハーケンにアブミをセットして乗越すのであるが、最上段に乗りにくい左をまいて行こうとしたが、バランスが保てず、再度、ハンクに取り付き、アブミの最上段にのりようやく上のハーケンに届いた。

ここからは、快適な人工登攀で第2のハンクをこえて、右にアブミトラバース、20mで東壁ルンゼに入った。

5ピッチ目 ここからは東壁ルンゼの登攀である、最初の15mは、ホールドがとほしくまた傾斜が強いためハーケンを使用しての腕力登攀であるが、以後は傾斜もおちてフリークライム40mでビレー点に着いた。

6ピッチ目および7ピッチ目の半分までは同様の、かわいたルンゼのフリークライム、最後はルートを左に取り、ポロポロの草付凹角を登り、終了点のテラスでビレーして登攀終了、T4から、4時間50分であった。

ここは、鵬翔ルートの終了点でもあるので、立岡、古賀パーティは5分ほど前に着いたところであった。

雲稜ルートは全体にボルトに注意しなければならないが、ハーケンは多すぎるくらい有り、初登当時とくらべたら当然グレードも落ちている。

むしろ、東壁ルンゼに入ってから、ぬれている時など悪くなると思う。

また、核心部を終った気のゆるみも気をつけなければならない。

記.釜本

## 穂高屏風岩東壁鵬翔ルート

1973年 8月6日

パーティ、立岡 佐智央、古賀 英年

六日、横尾発4時、晴れ。T4尾根下部岩壁取付着5時。順番待ちなし。昨日までの雨で濡れている下部岩壁は、なかなか悪く緊張しながら2Pでこれを登りT4に着く。草付バンドを1Pトラバースし、フェースをアブミで越え岩溝ぞいに2Pで大テラスに至る。

大テラスからは、かぶり気味の壁を左上し、ハーケンに導かれながら快適に登り、小ハンクの

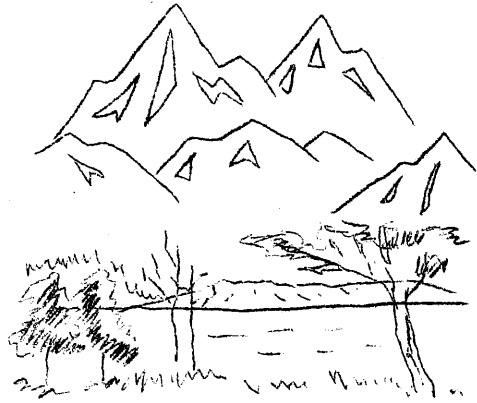
右を回りこんで小テラスに出る。小テラスからは単調な壁を10mほど登りハイマツのある小テラスに出る。

そこから直上し、シャフトの極端に長いボルトにそって登り、50cmぐらいのハンクを強引に乗り越して、アブミビレーする。ビレー点から右へ1mトラバースした所から左上し、フェースから草付にうつり10mほどでブッシュ帯に入る。急なブッシュ帯を3Pで雲稜ルートとの合流点に着く。

ハイペースの登攀に気を良くし、両者思わず握手をかわす。

(タイム)

T 4 尾根下部岩壁取付き	5:00
T 4	6:00
大テラス	6:40
大テラス発	7:00
登攀終了点	10:35
合流点	11:10



## 前穂東壁右岩稜

三浦靖男

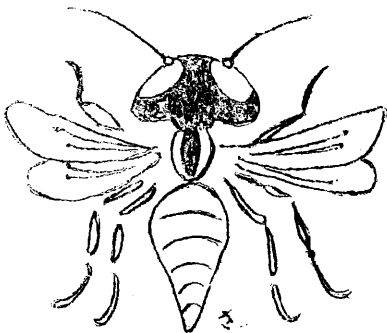
8月7日 いやな三。四雪溪を無事下降し前穂東壁の取付に急ぐ。昨夜は満天の星空でそうとう冷え込んだが、今日はとても良い天気だ。水を補給し登攀の準備をしているあいだにも、他のパーティが近づいて来る。8時、準備完了し、ぼくがザイルのトップを受け持つ、フリークライミングは、ぼくの得意とするところだ。上昇バンドの取付がわからずダイレクトルートのあたりで切る。続く釜本がそのまま平行にザイルを伸ばし、上昇バンドの取付に着く。取付では関東のパーティが準備をしていたが、登攀ルートが違うので先に登らせてもらう。

右斜め上に走る草付バンド2ピッチを難なくこえ、古川ルートを取る。3ピッチ目からは、草付のないすっきりしたスラブに走るクラックを快適に登る。堡壘の西稜のクラックより楽だ。昨日の屏風岩での人工登攀とは違い、手足を総動員してのフリークライミングである。30cmばかり

りのテラスで続く釜本を迎える。入山日、雨の中を足いた徳沢あたりが今、目下に広がる。天気は申し分ない。4ピッチ目、右岩稜の核心部に入る。7mぐらい真直に登り、それから右にハングの下を四つばいになるような格好で通る。ザックがひっかかり、体が放出されそう。右に行きこんどは左上の岩のつまった垂直のところに行く。ところどころ岩が突き出ているので落ちそうになる。雪彦で墜落した時のことが思い出された。あの時も同じメンバーだった。だが恐いとは思わない、むしろ早く上へ行かなければと思い最後のクラックをこえる。テラスに出た。右岩稜は終わった。ひと息ついてから釜本を迎える。ザイルワークが悪いためザイルが重い。釜本を迎えてからテラスを右に8m行き、ちょっとしたリッジに出ると、Dフェースの全貌が目の前に迫ってくる。その中に立岡、古賀の姿が見える、むこうも同じくらいのピッチで登っている。

コンティニアスで20m北壁を登る。ぼくがチムニーに入るがザックが邪魔になる。チムニーをこえると第二テラスであった。ここはガレ場なので、ひっきりなしに落石が発生する。釜本を待つ間にもあたりをガスが去来しはじめ、ガスの切れ目にAフェースの凹角が見える。コンティニアスでAフェースに向かうがぼくはだいぶ疲れたので釜本とトップを代わってもらい。Aフェースの1ピッチ目、堡壘の東稜を登るぐらいのスピードで快適にのぼる。乾いた岩に雨があたり熱でその雨がすぐきえる。心配することはもう何もない、頂上はあと1ピッチのはずである。2ピッチ目そのままぼくがザイルのトップに行く、チムニーに入るがザックが邪魔になりしかもかぶりぎみなのでいやなところだ。10m直上し右のフェースをこえるとテラスに出た。Aフェースも終わった。ここからコンティニアスで20mぐらい登ると、そこは登山者で賑わり前穂の頂上であった。11時40分無事登攀も終りザイルをといた。

立岡、古賀パーティを待ちながら事故もなく登攀が行なえたことは、トレーニングが良かったためと思い自分のテクニックに確信が持てた。後半の滝谷登攀がおもしろくなりそう。



## 前穂高東壁：Dフェース<田山ルート

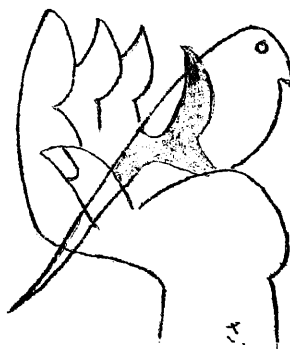
立岡・古賀

8月7日 晴 にわか雨

午前7時、登攀の身支度を整えて、まだ日の届かぬC沢の下降にかかる。アイゼンがないので急な雪渓上を敬遠して左岸のシュルンドの中を半分程下降、アンザイレンして右岸にトラバースする。右岩稜に向い釜本、三浦と別れ、我々はB沢のどんづまりをめざして登る。Dフェース取り付き7時50分。1P目は一見コンティニアスで行けそうな斜上バンドだが、取付いてみると、しだいに傾斜が増えてきてかぶり気味の所もある。2P目はDフェースで一番楽しめる所。帯状のスラブとして遠望される所だが、しっかりしたホールドとハーケンがあって気持ちよく登れる。25m。3P目は本ルートの核心部。ハングの下をぬりようにして右上してゆくが、不安定なアブミトラバース、中途半端なハーケンが多くやたら神経をすりへらし、40mいっばいで半身はいれる岩穴についてほっとする。4P目は3級のフリークライミングとは言え、浮石をだましながら登る危険を加算するなら一級アップしよう。「ぬけそうだ」と言いながら登って行ったトップのハーケンはハンマーの一撃でズボッと抜けてしまった。5P目、大まかで容易な草まじりを左上に40mのばし、1、2峰間ルンゼに入り、終了する。11時45分。

「岩登りの楽しさ」のあまり味わえない登攀ではあった。

記・立岡



## 北 鎌 尾 根

1973年8月1日～8月5日

パーティ 堀野、川島、南

8月1日

小雨にけむる大町に着く、タクシーで葛温泉まで入る。ダム工事のため東沢まで荷物だけ運んでくれるので、ヘルメットと雨具をつけて、七倉、濁、東沢へと歩きつづける。雨足はひどくなるばかりで湯俣に着くころにはぬれねずみ、寝不足と雨の入山には、いつもながら悲しい、でも夏草の緑が一段とさえ、目にあざやかなのがなにより、今日で3日も降りつついている雨と、天上沢の様子を聞いて、湯俣泊りとする。昼間から温泉に入るなんて最高!

葛(5:15) - 濁(7:10) - 東沢(7:50～8:40) - 湯俣(11:00)

8月2日

今日も雨、雲の動きなし、風の方向悪く、天気凶変化なし。湯俣合宿で終るより、少しでも北鎌の近くに行きたい。北鎌沢の出合いまで行くことになる。湯俣からは、山の匂いがしてくるよりに、時々、顔を見せる硫黄前衛峯は、雨の中にけむって岩肌が印象的です。いまにも切れそうな吊橋を渡ると千天出合に着く。雨は本降りになり寒い。歩いている方が快い。単調な沢歩きも広い河原になると、北鎌沢の出合に着く。明日の天気を祈りつつシュラフにもぐる。

湯俣(10:00) - 千天出合(12:30) - 北鎌沢出合(3:00)

8月3日

5時起床、雨変わらず、もう一度シュラフに入って濡れた岩稜を想像すると自信ない。でもここまでくると天上沢より北鎌沢の方に足も心もむく。雨の様子を見て8時出発、長い登りの末、着いたコルは狭くきたなかった。寒さにふるえながら昼食をとる。ハイ松の登り、やせ尾根を進むと岩稜の登りになる。少し登るとガスが切れて独標が顔を出す。すぐ記念写真を撮る。又霧の山稜がつづく。入山前は、青い空と、白い雲と、冷たい岩肌と、満天の星が、北鎌尾根のすべてだと思っていたのに。でもふるえながら登る霧の北鎌も又楽しい。霧で時間と距離感覚がわからなくなったので、テント場を捜してはる。暴風雨状態とカミナリの音に驚きながら、寒い夏山をはじめて経験する。

北鎌沢出合(8:00) - コル(12:00) - テント場(6:00)

8月4日

地図上でどこかわからないテント場を出発、千丈沢に下って行くトラバースルートで、まちがっていることだけはわかっている。稜線上のルートを捜しに苦勞する。ケルンに導かれ、槍の祠



の裏に出る。頂上に立つと太陽が顔を見せる。久しぶりに光の中に身をおくと気持ちがいい、青い空、白い雲、まぶしい光の中で見る山々は、いつもの夏山です。振り返って見る独標は威圧的、テント場、北鎌平の位置やルートの確認をして、槍平に下る。緑深い槍平は沢音と、満天の星に恵まれ、最後の夜を楽しむ。

出発テント場(6:30) - 槍(11:00) - 槍平(4:00)

記・南

## 滝谷・ドーム西壁

立岡・三浦

8月8日 快晴

屏風・前穂東壁と登りつないできて濁沢のベースに入ってしまうとほっとしてしまいせいか、南稜の登りはいっこうにはかどらない。しかし、一步滝谷の日陰の中に身を置くと不思議な程身のしまる思いを経験する。沢左俣を少し下降して最初の濁滝の上をトラバース、西壁Bフェース取付点8時40分。ドーム北壁には3パーティも取付いているというのに西壁に人影はない。他パーティでも居れば気も紛れようが、2、3日前のここでの事故のことが、ふたりの頭の中からはなれなかった。黙って登攀具を身につけ、立岡トップで8時55分取付く。Bフェースを左右に分断するクラックは遠くからはみごとなクラックに見えるが、実際はカワラを積み重ねて割ったような割目である。しかし薄いホールドも岩が堅いのでまず快適だ。25mの小さなレッヂで1P切るが、40mいっばいでBフェースは抜けることができる。

2P目は、トップ三浦微妙なバランスで直上、一部はアブミを使用し最後はしぶいレイバックで大バンドに立つ。15mコンティニアスで進み、Aフェース下半はこまかいバランスクライミングを楽しむ。35m。

4P目は右の濡れたいやなクラックにはいり、ハング下で一担切り、右に悪いトラバースをして、凹角からハングを越えドーム頂稜へ豪快に出る。終了11時30分。人工にあけくれる屏風岩等と違って久しぶりにすっきりした登攀を味わえることができた。(先日の事故のこともあり、過度な程慎重な登攀ではあったが。)

昼食後、第一尾根に向う。

## 夏山合宿

(848・8・4～8・7までの記録)

古賀英年

8月4日、最終の新幹線で新大阪駅を出発する。名古屋までは、暑さを感じずにすごせたが、名古屋駅に降り立つと汗がほとばしりだす。新幹線の車内放送で言っていたとおり、中央線への列車は1台も動いていない。というのは名古屋地方への局地的豪雨の為である。いつ列車が走るかもわからないひどいありさまである。

今回の合宿は、こんなわけで、出端をくじかれた形ちで始まった。

8月5日、昨夜、新幹線で名古屋に着いてから約8時間ぶりの7時すぎに、やっと中央線開通になりこの日最初に動いた列車に乗りこむ。天気はぐっと良くなり、木曾福島に着いた時には晴天となっていた。木曾福島から3時間ほどバスに揺られて上高地に着いた時は、もう正午を過ぎていた。上高地の天気は良くなく、明神館の手前で雨となったので、急いで明神館に入って、とりあえず昼食を食べる。雨が小降りになるのを見はからって出発。徳沢園まで来ると雨もやんだので、カッパを脱いでしまい、散歩気分で横尾に向う。

横尾着16:20。居心地の悪そうな小屋をさけて、河原にそって30分ほどで横尾岩小屋に着いたが満員だったので対岸の川原でビバークする。

明日の行動を考え、早々に寝入る。

8月6日、誰かの声で目をさますと3時である。ツェルトから出てみると、空一面に星が輝いている。今日は天気が良くなりそうだ、一同ハリキって出発準備にかかる。昨夜決めておいた通り4時にビバークサイトを出発し、T4尾根下部岩壁の取付きに着いた時には、もう夜も明けきっていた。登攀準備にかかっている間に他のパーティが次々に登ってくる。しかし先行パーティはいない様である。雨で濡れている下部岩壁は以外に悪く緊張させられたものの、T4に着いた頃には、体もほぐれてくる。T4からは、雲稜ルート、鵬翔ルートに分れて登り、11時過ぎに、ほとんど同時に合流点で出合う。合流点で大休止した後、12時過ぎに出発し、登り下りの激しい北尾根に悪態をつきながらも夕やみ迫る7時に3、4のコルに着く。風当りの少ない岩陰にツェルトを張り長かった今日1日の行動を終える。

8月7日、5時起床、6時半出発。沢の雪渓はシュルンドにそって下り各ルートに取付く。11時半に両パーティ前穂の頂で顔を合せ、昼食の後、残留組に見送られ下山組なんとなくもの

たりない気持ちで上高地に下る。

(古賀記)

## 滝谷・ドーム中央稜

立岡・三浦

8月9日 晴のち曇、のち雷雨

1時5分。T2で三尾根を登る土居、良田と別れ、立岡、三浦で中央稜に向う。1P目はガリー状のフリークライミングで30m。2P目、右上のチムニーを狙うが狭すぎて断念し、かぶり気味の所を左から回りこんでチムニーの上に抜け、非常にこまかいホールドのフェースを、10m直上。西壁側のかぶり気味の左上凹角を抜けてT・Cに立つ。4P目、チムニーからスラブ直上、5P目、雷が鳴りだし、容易な凹状をまさにかけ足で抜けてドーム頂稜に立つ。同時に雷雨はげしく降りだし間一髪のところであった。

終了 2時30分。 溜沢B・C 4時10分。

## 7月の錫杖岳

内藤久嗣

今年の夏は雨が少なく、水不足でむしろ暑くアルプスへ行きたいと思う気持ちが高鳴るばかりだった。7月27日夜行最終新幹線にて名古屋へ向った。連絡急行高山号にて7月28日午前3時ごろ高山着。タクシーにて槍見温泉へ飛す。朝もやが立ちこめる槍見は少し肌寒むかった。以前穂高合宿の帰り錫杖の前衛岩峯を見て幾日は登攀したいと思っていた夢が今実現しようとしている。歩く歩調も快ろやかにクリヤ谷出合まで1時間10分位で着く。碧空にくっきりと前衛フェースが立ちだかって私達を待っていた。静かな山城で小鳥の声、お花畑も多く心の安らぎを一時的に与えてくれたが、取付点に着くころフェイトが漲ってきた。岩質も硬く高度感も素晴らしく快適な登攀を味わいながら、約8ピッチで前衛フェース頭に出た。友と握手をかわし、鳥帽子岩を廻り込んだころ、ポツリポツリと雨が落ちてくるではないか、焼岳に雲が掛り、明日の天気はどうやら雨らしいので北沢を下りその日の内に槍見温泉まで下った。露天風呂に入り、登攀の喜びを語り、再びこの地に入る事を思い帰神した。全般的に前衛フェースはむつかしい。屏風岩と同じ位の難度もかなりあり、又、新人も楽のしめる各ルートもある。まず人がいないという点が、

一番良かった。

記 内 藤 久 嗣

(雑 記)

今、神戸山岳会会員は結束を強め、一流中の一流の山岳会であると各自が認めなければいけない時期にあるのではないのでしょうか。

会員皆な現役だ //

## 剣 岳

萩 本 維 都 子

室堂に着いたのは、もう昼近かった。立山—美女平間のケーブルと、室堂までのバスがどちらも大変な込みようで、時間待ちのために予定が遅れてしまった。黒部方面へのハイカーや、旅行者達の中に、チラホラとニッカーズボン姿が見える。そのほとんどの人が、ビッケルとヘルメットを持っている。「ああ、岩をやりに行くんだな」とうらやましく思う。

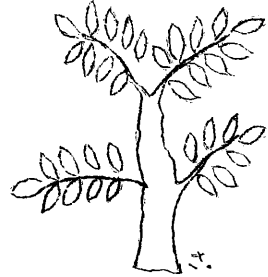
室堂を出発して、さあこれから立山へと見上げると、立山は霧の帽子をスッポリ頭からかぶっている。天候も荒れそうな気配。今日の宿泊地の剣沢へは時間の余裕もないので、最短コースの雷鳥沢を登ることにした。どうしても自然の道とは思えないようなジグザグ道を、荷上げの人達の後からあえぎながら登って行くと、途中から霧が体を包み初め、しかたなく雨具をつける。剣御前小屋近くなって、急に風が強まり視界が全くなりかなくなった。時々強い突風が吹いて、フラッとこけそうになる。その度毎に心細くて、目の前の道だけを見つめながら、これを行けば剣御前小屋につくのだと、頭の中で念じていた。御前小屋から剣沢への道も、晴れていたらすぐそこなのに、ベンキの印が見つからず右往左往しながら着いたにもかかわらず、剣のお山はおろか何にも見えない。

翌日はすごい雨と風で停滞。しかし夜になって天気は回復。初めて自分が山に抱れているのを知った。月はなく、星あかりの中に、剣岳が黒くそびえ、その急峻さと初めて見る山の姿に、ハンマーで叩かれたように胸がズキンと痛んだ。一瞬、逃げたいような恐怖さえ感じた。けれども剣の上に輝く満天の星をながめっていると、なんとも言えない愛着がこみ上げて来て、不思議だっ

た。明日はあそこに登ろうと、情緒的に思った。

朝6時に起き、剣山荘を經由して剣本峰を踏み、その足で剣沢をころびまろびつ、真砂沢へ下った。平蔵谷や、源次郎尾根、長次郎雪溪を横目でにらみながら、エッチラエッチラ歩いていたら、3人のアルピニストとすれ違った。“登攀を終えて”の言葉がまさにピッタリの光景だった。剣ならでの印象だ。剣沢から見あげると、どちらの谷も傾斜はきつく、落石は多いようだった。近藤岩から三ノ窓、小窓の雪溪を横ぎり、池の平から阿阻原へ向った。

雪溪は下るよりも登る方が、疲れるけれども安心する。池ノ平小屋に着くと、インディアンが住んでいた。1年半のばした髪を1つに束ねその日焼けした顔にはちまきさせたら、まさに場ちがいのインディアン。彼に20円の貸しがある。池ノ平からの景色の説明料だ。これはぜひとも、来年も剣に行かなくてはならない。阿阻原から樺平まで運よく関西電力の軌道に乗せていただき幸いだった。



本当に“雪と岩”だらけの世界が剣にはある。岩を知らない私であつたら、この世界のすばらしさもわからず、この山は無味乾燥なものにしか映らなかつただろうと思う。八ツ峰やクレオパトラニードル、ジャンダルム、いつの日にか登りたい。味のある世界を見つけるために。

剣岳で悟った事

- 1 岩は意気と力で登るもの
- 2 アルピニズムとは、死なない程度に無理をすること。

## 東北・朝日

〔竜門小屋-以東岳-大鳥池-大鳥〕

岡、立岡、三浦

8月16日

竜門小屋、停滞。小屋の上水道の修理

予期していた台風はそれらしいが停滞にはもってこいの日和である。終日、草原に寝ころび雲を眺めてすごす。穂高で縮んだ寿命をいくぶんなりとも、とり返せたような気がした。

アブの攻撃さえなければほんとうにすてきな停滞日であった。

8月17日

竜門小屋発7時15分。晴れた日の稜線歩きはほんとうにすばらしい。ましてすれちがう人さ

えまれな朝日山系では、心ゆくまで自然の美しさの中に溶けこむことができる。10時40分、以東岳。眼下のまっ青な大鳥池めがけて800mを駆けくだる。大鳥小屋1時30分

8月18日

4時50分、大鳥小屋発。朝日の山はほんとうに山が深い。標高こそ2000mに満たないが、入下山に丸一日を費やさねばならない。下山というのに、標高差400mの泡滝峠を越さねばならぬし、大鳥部落まで林道を歩けば一日がかりだ。幸わい、我々はタイミングよくトラックを拾うことができた。

山旅も2週間目を向えると疲れもでてくる。ゆっくり体をいやしたいものだとも思う。反面山の生活から離れてゆくのが淋しくもある。旅とはいつもそういうものかもしれない。下界はまだ夏の盛りであった。

了  
記 立 岡

## 東北・朝日岳

〔イリトゥシ沢本谷下降～イリトゥシ沢右俣溯行〕

岡、立岡、三浦

8月14日 晴

イリトゥシ沢は、朝日山脈の北東面、見附川源流にあたり竜門山に突き上げている。イリトゥシ本谷が標高差800m、右俣1000mである。竜門小屋に着いたのが9時すぎであったが、明日からの天候が不安定なようなので、今日中にイリトゥシ沢をかたずけておくことにする。リーダー



から明日は停滞という確約をとって。地下たび、わらじのいでたちで竜門小屋裏の小沢を下る。10時10分程で小滝が連続し左に支流を見て危ないラントクラフトの下をかいくぐる。20～40mの滝、滑りの連続でけっこう緊張する。おまけに人跡皆無ときているから、これ程私たちが楽しくさせてくれることはない。600m程下降した所で釜のある50m位の滑滝があり、やむをえず左岸の草付きをはい登り高捲く。標高900m 地点の出合は30m程の滝になっており首尾よく右岸を下降。チムニーのようなシュルンドを苦勞して乗越し雪渓上に出る。本沢、右俣の

出合は、豊富な残雪に完全に埋っているが、本沢の滝が底知れないようなシュルンドの暗闇に吸いこまれているのでどうしても手がつけられず、右岸の草付きから強引に高捲き、けもの道を利用して右俣に降りたつ。12時30分。出合から見ると、岩壁に一条の糸を引いて落ちる右俣上半はまさに壮麗でさえある。出合より雪溪上を15分、関門の滝40mは右岸を、そして滝上の合流点の滝は左岸から高捲き、滝、ゴルジュ帯の連続した所をシャワークライムして、次の合流点の滝を右にとる。沢はいくぶんおだやかに屈曲を繰り返し、140mの大滝に突きあたる。三段からなるこの大滝は、楽しいことに順層で、右岸を快適に直登することができた。沢登りの醍醐味である。大滝からはさほど興味の湧かない小滝が続き、水脈を最後までつめて南寒江山の頂稜に出た。3時30分。重たくなった足をひきづってはるか遠くに見える竜門の赤いテントをめざして帰路についた。

立岡

## 屏風岩1ルンゼ登攀

内藤①、②、小崎

9月8日快晴

登攀開始11時40分、取付点(ルンゼ入口)より約30m程の滝を登り、斜度のゆるいクラック70m程をコンティニアスで登るとT1に出る。先行パーティがあり少し待つ、ここからは、離れて見たよりもかなり高度感があり、登高欲をかきたてられる。谷芯より左の浅いクラックにルートをとる。上部にハーケンが4本程連打されており、これに導びかれて30m位降り左にかぶり気味の岩を下の細かいバンドをハーケンを頼りに5m位トラバースする。ここは大変高度感があり、気持ちがよい。これより左に斜登すると50cm位のバンドが走っており、ここでハーケンを打ち、ビレーする。2ピッチ目は、これより右端にバンドを伝い1m位のホールドのないこぶを強引なフリクションでぬけ、傾斜の落ちた快適なフェースを30m位登る。ここがT2である。T2より谷芯左側のこまかいフェースを登るとつるつるに磨かれたスラブを残置ハーケン5本程を使い吊上げ気味に乗り切るとT3に出る。ここは、小石や砂利のあるテラスで、小休止する。東壁を攀るパーティが大変よくながめられる。ここより谷芯へバンドを伝ってカンテ状の所を登るがホールドが細かくハンク気味であり、吊上げで、乗越す。見た目より、大変むつかしく感じられた。これより20m位やさしい登りで大きなテラスに出る。これより左へは東壁への

横断バンドが走っている。T5より右手に角の多いフェースを谷芯よりに登り、草付きのクラックを更に攀ると、上部の押えられたチムニーの下に出る。チムニーの右側のカンテを登るとT7に着く。この上はスラブのフェースで谷芯の左に攀り残置ハーケンを使い、かぶり気味の所も強引に乗こすとT8に出る。T8より右のクラックを20m直上しT9に出る。ここはザラザラの砂利で不安定である。これより20mの凹角に入ったが、先行パーティの落石でハッと思わせる事が、再度あり、恐怖におびえながら、1ルンゼ中最悪部に突入する。凹角を抜けると、複雑なチムニーに入りテラスに出る。これより上にチョックストーンの登攀にかかるが、先行パーティが以外にてこずっており、待たされる。チョックストーンは左のクラックから吊上げで乗越す。ここは微妙なバランスと腕力の要する所で、登った時には、やれやれと言う気持ちにさせられる。これより上が中段台地でこれよりコンティニアスで、大スラブまでゆく。大スラブは、傾斜も余りなく、フリクションが快適に利き大変楽しい登りであった。左俣にルートを、約200m登ると3~4人は休めるテラスがある。ここまで達したころには、早や18時をまわり暗くなっていた。テラスよりアンザイレンで傾斜の強い10m位のカンテを登るとやさしいが大変もろいフェースに出る。約80m位で大きな岩峰の下に出る。KAOの先輩の記録では、岩峰下をプッシュに伝って1ルンゼと2ルンゼの境界尾根に出ているようでしたが、やはり奥壁を見たかぎりには、登りたくなり、奥壁を登る事にしたが、直暗闇で何も見えず、良いビバーク地点もないので、ヘッドランプを頼りに80m程下のテラスへ懸垂下降し、ここでビバーク。余り寒くなく快適に眠れた。

9月9日快晴

6時30分登攀開始、昨日登ったフェースを登り真直ぐにガリーに入る。このガリーの登攀もかなりむつかしく、朝から緊張させられる。ガリーを登ると、真正面とすぐ右手にチムニーがあり右手を攀るがホールドがほとんどなく、あったと思えば全部はがれてしまい危険極まわりない状態であった。残置ハーケンが連打されていてこれを頼りにチムニーを乗越す。最後のハーケンにカラビナが残っていた。先行のパーティの死闘がうかがえる。約40mのチムニーを越すと今度は、オーバーハングの草付のフェースで、5m程登り下向に打ってある残置ハーケンに恐る恐るアブミを掛けて2m位トラバースし、草付のクラックを、ハーケンに導かれ80m位登ると、ひょっと境界尾根に飛だした。この2ピッチは、1ルンゼ中最悪のように私は思われた。後は、屏風の頭より最低コルへ出て、これよりパノラマ道を一気にかけ下った。

所要時間 9時間



## 時間記録

9/8 取付点11時30分ビパーク地18時30分

9/9 ビパーク地6時30分、登攀終了9時  
最低コル10時、徳沢園11時40分

グレード 5級A1

登攀距離 約650m



## 会 員 動 静

### ○ おめでた

会員の釜本孝彦さんに長女誕生

9月3日生 「たかね」ちゃんと名付けられました。

## 月報投稿要領

- 20×20 市販の原稿紙
  - 横書き、楷書
  - 投稿先は前田宅まで
  - 慶弔、移転等のお知らせもお寄せください。
  - 〆切期日厳守
  - ズッコケ記事も大歓迎
- ただし、ハイ・ソサエティとしての面目さ保ちつつ。

## —— 編集後記 ——

夏山がすんでほっとすると、ことしの夏も  
終わったという気分になる。しかし秋というに  
は早すぎて、夏のほてりをひきつりながら落  
ちつけない中途半端な季節でもある。夏の思  
い出も、もうそろそろ旅のアルバムにしまっ  
ておくことにしよう。「月報」というアルバ  
ムにそっとしまっておくことにしよう。

落坂落太